明石の史跡（９２）日輪寺の鰐口

神戸市西区玉津町小山に所在する普光山日輪寺（天台宗）に、鰐口が存在する。銘文は下記のとおりである（兵庫県史史料編中世４．６０６頁）。

（阿波国）

奉懸名西庄新宮鰐口大願主源井内右京亮倫元（銘帯右方）

（梵字）

永正六季己巳十二月廿八日大工久千田行次　　（銘帯左方）

鰐口（わにぐち）は、「神社仏閣の軒先に懸けられ、前面に鉦（かね）の緒という布縄」を垂らし、参詣人は、この緒を手にし振って鼓面を打ち、誓願成就を祈念する梵音具」といわれ（国史大辞典１４．９３２－３頁）、しかも、この鰐口は、阿波国名西庄新宮（現徳島県石井町新宮本宮両神社）に奉納されたものである。なぜ徳島県で製作・奉納されたものが、瀬戸内を越えて、神戸市西区の寺院に、存在するのだろうか。

天文２３年（１５５４）の冬頃より、阿波の三好勢がその姿を現すようになる。太山寺には、１０月日付の豊前守（三好義賢）の禁制が存在するところからも、三好勢が明石郡内を席捲したようで、年があけてまもなく、三好長慶自身が明石に出陣し、太山寺に陣を構えた。明石氏は、籠城したままで、干戈を交えることなく、和議を懇望して事なきをえる（細川両家記）。播磨守護赤松晴政の隠退後、その子義祐による守護家復興を名分とするものであった（兵庫県史３．２７９－８０頁）。

寺には、天文年間（１５３２－５５）三好勢の乱入による焼失、のちに宥寛が堂宇を再建したとつたえる（明石記）。合戦には音具がつきものである。目的を達成（明石郡平定）した三好勢は、戦勝のひとつの証しとして、日輪寺に奉納して帰国したものではなかろうか。

日本歴史学会会員　　茨木　一成

日輪寺の鰐口